

任意団体からの移行により、法人第1期は約2ヶ月間です。

■方針

計画

「ラオスのこども」は、ラオス人が主体となって長く続けられる事業の運営をめざします。担い手を発掘し、人材を育成するとともに、資金を現地で集められるようにすることで、それを実現するしくみづくりを進めます。

日本では、経営能力の強化、組織運営体制の確立と参加の拡大を図り、経営を立て直します。

評価

「Deknolao 特定非営利活動法人 ラオスのこども」は、「ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会」から、すべての事業（プロジェクト）と組織、資源を引き継ぎました。

本部機能を東京からラオスに移すことは、ASPB時代からの戦略課題でした。そのための担い手を育成すべく、努めています。ラオス事務所ではプロジェクトの企画立案や運営面においては、人材は育ってきています。今後、専門性を高めていくことが必要です。また、リーダーシップを発揮する人材はいますが、リーダーに代わる者の育成が課題となっています。

資金調達の現地化について。子ども文化センターには、かねてより当会が資金援助削減の方針を伝えています。それぞれの運営の担い手であるラオスの各自治体は、意識は高まっていますが、具体的な手だてに乏しく、なお模索中です。

JICAとの連携による「開発パートナー事業」が2002年12月より始まりました。当会が10年以上にわたって経験をつんできた読書推進運動をベースに当会が事業を企画、運営し、それに日本の政府開発援助（ODA）の資金をあてるというものです。この事業によって事務作業が非常に膨れ上がりました。この事業に対して、運営能力、アカウントビリティ（事業の結果への責任をふまえ、過程を説明する能力）などパートナーであるJICAからの評価は高いものがあります。

「子ども調査」を計画しています。ラオス社会で子どもたちがどのような環境の中にあり、子ども自身は何を望んでいるのかを把握していく調査です。プレ調査以降、予算のめどが立たず、また人員も投入できずに足踏みをしています。とはいえ、読書推進運動でも調査の取り組みがあり、また子ども文化センターで「子ども参加」が前向きに取り組みられ、ラオスの大人にとっても日本のNGOにとっても、「子どもの発見」（子どもを保護や教育の対象としてのみ捉えるのではなく、主体的な一人の人格として捉えること）は着実に前進しています。そうした流れの中で、子ども調査は位置付けられ、実施されるべきもので、機は熟しているといえます。

■事業

【出版】

ラオスの作家と日本の絵本作家、紙芝居作家、編集者、研究者などの協力を得て、ラオスで出版事業を手がけてきました。創作、民話、翻訳、環境、工作など子ども向けや一般向け古典再版など、10年ほどで90点あまりを出版。およそ45万部に上ります。コンクールなどを通しての作家の発掘、絵本作りセミナーなど育成にも力を入れています。

計画

- 子ども向け図書、1作品（5,000冊）を編集して出版。
- 「紙芝居コンクール」2作品の編集。
- 「絵本コンクール」3作品の編集。
- 「ラオス出版委員会」（4名。出版図書の選定、編集）を資金や面などで支援。

実施

- 子ども向け図書『孤児とその妻』(5,000部)を出版。
- 絵本コンクール入賞作品『マニユイとチャンタイ』(5,000部)を出版に向けて編集中。
- 絵本コンクール入賞の3作品を1冊にし、出版に向けて編集中。作品は絵本ではなく短編なので挿絵を入れる。イラストレーターは新人を起用。
- 編集。「紙芝居コンクール」2作品 作品の手直しのためのアドバイスをまとめる作業中。
- 「ラオス出版委員会」を支援 基盤をしっかりとさせるため、増員に取り組んでいるが、人材の確保が困難。助成金はないが、予算は増やしていく。

評価

作業内容は、概ね、計画通りに行われています。

運営面では、編集委員会による編集、出版を進めています。以前は、ラオス人作家を出版アドバイザーとしていましたが、編集者やイラストレーターなども加わった多様な顔ぶれで作品の選定、作家発掘ができるようになり、出版作品の内容に広がりが生まれてきたことは成果として挙げることができます。また、作業スピードも大幅に改善されました。今後は、編集、制作管理まで委員会のもとに行っていくことをめざしています。

2002年2月実施のラオス初の「紙芝居コンクール」は、小学生から大学生、教員、CCC職員と裾野の広がりを示し、10年近くになる紙芝居の取り組みの成果といえます。作品のテーマや内容も充実し、質も高くなっています。

一方、同時に実施した「絵本コンクール」は2回目ですが、応募作品は満足のいくものではありませんでした。応募の規定を、文章だけでも可とし、ハードルを下げたことが安易な応募を増やすことにつながったのかも知れません。ジャンルも、民話に限定せず、社会的なテーマ（環境、ドラッグなど）に広げたことが、結果として文芸性とは縁遠いものまで応募されることに結びついたのかもしれない。ラオス人の作家、編集者による審査員は、応募作を酷評しました。

今後、出版に際しては、これまでに発掘した作家の育成に力を注ぐべきかもしれません。コンクールの位置付け、内容は再検討が必要です。

【読書推進運動】

ラオス国立図書館の読書推進運動に協力し、図書館や図書袋に図書を詰めて全国の小学校へ届けるプロジェクトを、1992年より続けています。現在、JICAとの開発パートナー事業として行っています。読書推進活動の自立（ラオス人による活動推進）のため、当会では、各県の教育監督官も研修に参加することや、教員養成校で先生の卵を対象とした図書館教育の講座をラオス教育省に提言し、実施されています。

計画

- 図書の補充、利用状況調査。既配布先2県106校
- 学校図書室（ハックアーン）の整備。小学校1校、中学高校1校
- 教員養成校の「読書推進カリキュラム」用テキスト（試用分3,500冊）を作成、配付
- 読書啓蒙雑誌発行。出版委員会を中心に編集。継続して発行

実施

- 図書補充。図書担当教員と教育指導官への読書推進セミナー、サワンナケート県40校（カンムアン県66校には4月に完了）
- 実施前の読書環境の調査（ベースライン調査）、サワンナケート県40校の内の中学校を対象に実施。
- 配付セミナー用教員向けテキスト『図書館・図書袋の使い方』2,000部
- 図書館／袋、図書の準備（10月～12月に配付する分）
 - 図書箱270箱、図書袋180袋の発注
 - 配付図書リストの確定、図書の購入
- 対象校の確定（10月開始の分）

- 図書箱／袋の配付対象5県360校
- 図書補充対象5県354校
- 学校図書室（ハックアーン）の整備、小学校1校（HakArn86）

評価

補充、セミナー、テキスト、調査と、計画通りに進んでいます。

JICAとの連携で資金が確保でき、当会は研修の質と量の向上を実現することができました。これによって、研修の企画運営能力をラオス側のものとするをめざしています。

セミナーの課題、問題点は、実習時間が短い、抽象的でわかりにくい内容がある、教員の異動が把握できずに中級編を新任者に実施してしまう、など。

また、セミナーを実施する国立図書館職員の意識がなかなか向上しないという問題を抱えてきました。しかし、セミナー用テキストは試作版を作るなど、受講者の立場に立って、より理解しやすいようバージョンアップを図っていくという取り組みで、意識改革をめざしています。

調査も、調査を行うという意識を持つことと、そのノウハウがラオスの人々のものとなることが大きな財産となります。社会主義国のラオスで外国の団体が調査活動を行うことは困難をともないますが、配布とセミナーに組み入れるなどの工夫をして実現しています。

【子ども文化センター（CCC）】

学校教育ではあまり行われていない図画工作、音楽、伝統芸能など情操面の教育を行う児童館型の施設として「子ども文化センター」を開設、運営支援をして8年になります。数年前より、政府が重視し、現在全国19か所で活動が行われている。当会ではそのうちのヴィエンチャン、ボリカムサイ、サイヤブリ、ルアンパバン、ゲンタオ市（サイヤブリ県）、シーサタナークの6か所で、運営費と図書補充費を支援している。

計画

- 6館を運営支援。
- 経費（講師、スタッフの person 費、教材費など）を支援。
- 合同会議の開催。

実施

- 6館を運営支援。
- 経費（講師、スタッフの person 費、教材費など）を支援。
- 合同会議を6月10～12日にヴィエンチャンで開催。

評価

6館の館長、職員が集まった会議では、各館とも子ども文化センターの運営に高い意欲が示されました。

学校であまり行われていない図画工作、伝統芸能などの教室、非行に走らない居場所としての役割、ボランティアの参加、子どもの参加など、従来のラオス社会にはあまり見られなかった新しい取り組みなどが、積極的に行われています。

子どもが自信をつけてきていることなど、成果に対し、高い評価を得ています。地域社会や行政機関や社会的認知、期待も高まって、「もはや無くすことはできない存在」となっていることが報告されました。1990年代半ばにラオス初の試みとして開始し、現在は、全県レベルから群レベルでの展開が国の方針となっています。

従来、CCCを巡る課題は、CCC自身による資金調達と理念の共有でした。理念について、当会は、どの子どもも享受できるCCCを謳っていますが、ラオス側の中には、エリート育成、国威発揚を志向しているかのような姿勢が感じられる館もありました。「子ども参加」「子どもの権利」に前向きな取り組みに見られるように、大きく前進しているように思われます。

CCCがこうした取り組みしている背景には、ユニセフによる資金とプログラムでの支援がありま

す。当会には、その両方がなかったということでしょうか。

今後の重点課題は、職員、講師の質の向上と資金作りです。各館が自ら資金調達ができるよう、国際機関などへの申請書の書き方、資金管理の仕方などの能力が必要で、研修の強い要請が上がっており、ベトナムでの研修も検討されています。

【交流広報事業】

計画

日本で、ラオスや当会の活動への理解と交流を促進するイベントを開催。会報を発行。

実施

- ロゴを開発中。
- ニュースレターのB 5判からA 4判への変更の検討、ホームページの刷新を進めている。
- 企業向けに、メールマガジン、訪問ツール、DMなどを構想中。
- イベント用、ボランティア向け紹介ツールを開発中。

評価

「ASPBラオスの子どもに絵本を送る会」から「特定非営利活動法人 ラオスのこども」となり、広報物の一新を図っています。法人成立とともに完成していなければならなかったのですが、ロゴも作成中です。

資金づくりのため、広報物作りは、事務局と活動ボランティアを中心に取り組んでいます。イベントは運営能力を高め、収入面での成果を着実にあげています。

しかし、それ以外の部分での営業活動は、電話でのフォローや訪問活動など、実施部隊が揃わず、できていないのが現状です。

ホームページの日本語サイトの強化と英語サイトの新設も、なお取り組み中です。

企業との連携は、イベントや寄付を通じて行われ、連携している企業数は増えている。

イベントなどを通じた留学生との共同事業は、前進していますが、例えば3年後を見つめた事業展開というところまではいたっていません。

【組織運営】

◆東京事務所

東京の事務体制は仕事量が増える中、自主財源の確立と経営能力の強化を掲げ、専従の事務局長と資金づくりのための人材の確保をめざしています。まだ実現しませんが、事務局長が専任ではないにせよ常駐する態勢となり、改善が図られました。

法人化を機に、ボランティアがより積極的に運動の担い手となり参画者となる「参加の拡大」を図りました。責任と意思決定の経緯を明らかにすることで、参加の輪を広げる努力をしてきました。理事への参加や国内事業へのより積極的なボランティアの参加など、成果は出ており、法人化の作業の過程で育ってきたものと言うことができます。しかし簡潔な合意形成のプロセスづくりは模索中で、むしろ手続きの煩雑さに四苦八苦しています。

◆ラオス事務所

従来、ラオス人スタッフのみで運営してきたラオス事務所に、JICAとの事業により、日本人スタッフが駐在することとなりました。これによって東京事務所は現地の状況把握がスムーズになり、双方のコミュニケーションが改善されています。

資金作りへの意識は、フランス政府やカナダファンドなどから支援を受けるという経験などを通して、起こりつつあります。とはいえまだ出発地点であり、時間はかかるでしょう。